

「アイヌ語の地名に学ぶ(5)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

「地名解(ちめいかい)」ということばがある。その地名の由来について分析して、説を出す・・・という意味である。特にアイヌ語の地名は、「アイヌ地名解」という、一つの学問分野として成立するほど、さまざまな研究が行われている。私も、アマチュアの「アイヌ地名解」の研究者の一人・・・だと思う。

北海道の地名は、ほとんどがアイヌ語由来であるが、アイヌ語は文字を持たないので、元の発音をカタカナにし、それに漢字を充てたものが多い。その2段階の「変換」が、地名の解釈を非常に難しくしている。

「アイヌ地名解」で有名なのが、山田秀三、松浦武三郎、永田方正、知里真志穂などの諸氏であるが、一つの地名でも、それぞれに解釈が異なるのが普通である。たとえば、北海道の各所に存在する「トコタン」という地名を見ても、5つもの地名解が存在する。

- | |
|--|
| ① (ト°・コタン tu-kotan) 「なくなった・村」
*「ト°」は「トゥ / tu」と発音する。 |
| ② (ト・コタン to-kotan) 「山の端の・村」 |
| ③ (ト・コタン to-kotan) 「二つの・村」 |
| ④ (トー・コタン to-kotan) 「湖の・村」 |
| ⑤ 「トッコニ・コタン tokkoni-kotan」
「マムシの出る・村」 |

つまり、アイヌ語地名に関しては、どんな地名解でも良いのである。大切なことは、その土地の地形・地勢・生活などに忠実な解釈をする・・・という点だ。



「床丹駅」かつての湧網線の寒駅。現在は廃止され、床丹は、文字通り「廃村」となった。絵; C. Tanaka

さて、件の「石狩々布」の地名解は、前出のアイヌ語学者の著作には、全く登場しない。私なりに分析して、地名解をしてみた。

①イ・シカリ・カリ・プ (i-sikari-kari-p)

「石狩(川)が・回る・ところ」

石狩川(イ・シカリ・ペツ) そのものが「その・回流する・川」という意味である。石狩々布川そのものが、石狩川の孫流(支流の愛別川の更に支流)なので、そこから回り込んだ支流、という解である。



赤が石狩川本流、緑が愛別川、青が石狩々布川。

②イ・シカリ・カリ・ペツ (i-sikari-kari-pet)

「石狩(川)が・回る(った)・川」

ペツ(-pet)、ナイ(-nai)は「川」の意味である。「ペツ」のほうが「大きな川」、「ナイ」のほうが「小さな川」や「沢」を表す場合が多いが、地域によっては、区別がない。北海道に多い「薫別(くんべつ)」「真駒内(まこまない)」といった地名は、すべて「川」の名を地名としている。その、「ペツ」(Pet)が「プ」に訛ったという解。こうした例は、他にもたくさんある。(例; 比布 ピピ・ペツ pipi-pet = 「石が多い・川」 → ピップ) (つづく)